

体数増加率は高い。

## 課題 2

### 冷温帯域におけるオスの移動分散様式

小金沢正昭（栃木県立博物館）

東 英生（野生動物保護管理事務所）

ニホンザル地域個体群におけるオスの移動分散を明らかにするため、前年度に引続き、栃木県日光においてテレメトリー法を適用した個体追跡調査を行なった。本年度は7頭（オス4頭、メス3頭）捕獲し、イレズミをほどこした後、テレメータ（146MHz）を装着した。

1984年から89年の6年間に延べ12頭の成獣オスと亜成獣（2才）1頭の計13頭を捕獲し、追跡した。調査は、月5日から1週間の夜間連続追跡を行ない。テレメを装着した成獣メスによって同時にモニターされているA、B両群の位置とオスのロケーション地点から、オスの移動距離、分散距離、群れとの距離などを求め、さらに群れへの出入りを観察した。

群れ内オス6頭（A群4頭、B群2頭）の内、少なくとも1回は群れを離れた個体は3頭、群れ内に留まっているのは3頭であった（うち1頭は5年間留まり、2頭は本年度捕獲したものである）。追跡期間中に事故で死亡した1頭と追跡期間の短い1頭を除き、群れ外オス5頭の内、一時間にせよ群れに入ったのは、#5335とB群の周辺オスからA群に入った#5014の2頭であった。#5014は群れに入る前の2年間はA群の周辺にいた。#5335は、A群から離れることなく移動していたが、本年度に入ってA群周辺からも離れた。また、他の3頭は群れの周辺に近づくことはあっても、A、B両群へ入ることはなかった。しかも、この3頭（#5340：C群行動圏内捕獲、#6110と#6458：B群行動圏内）は、捕獲時の群れの行動圏から離れ、#5340は4ヶ月後8km離れた群れの行動圏へ#6110と#6458は隣接するC群の行動圏へ移った。さらに#6458は、その後A群の行動圏へ移り、周辺オスとなっていた。

これらのことから、オスの移動分散様式には、かなり短い時間の長距離移動するタイプと、比較的長い期間群れの周辺に留まっているタイプの2つ存在が示され、その割合は後者の方が多いと判断

された。

### 黒部川流域におけるニホンザル自然群の分布

赤座 久明（富山県大沢野中学校）

加藤 満（愛知県立高蔵寺高校）

1988年8月に、富山県宇奈月町内山で捕獲した野生群（OH-A群32個体）の成体雌にテレメータを装着し、遊動域の季節変動の調査を継続している。調査は、原則として毎月連続10日間、日没後群れの泊り場の位置を記録して、泊り場の分布状況から群れの遊動域を決定するという方法をとった。88年9月から89年8月までの12ヶ月間に109日間の調査を行い、109ヶ所の泊り場を記録した。泊り場は黒部川の左右両岸に分布しており、長さ約6.4km、幅約1.9km、面積約11.0km<sup>2</sup>の範囲で、川に沿って南北に細長く伸びている。泊り場は右岸側に60ヶ所、左岸側に49ヶ所を記録した。泊り場の標高で最も低い地点は、標高170mの黒部川の川原であり、最も高い地点は標高750mの宇奈月温泉右岸の稜線上であった。テレメトリー法による調査以前に、1979年から88年までの10年間に直接観察法による観察記録から推定していたこの群れの遊動域は、長さ約4.4km、幅約0.5km、面積約1.9km<sup>2</sup>であり、テレメトリー法に比べると20%以下の大きさにとどまっている。

群れの遊動域は季節によって大きく変動し、春と秋は落葉広葉樹の自然林を利用し、夏と冬は農作物に依存して人家近くの農耕地をよく利用した。季節毎の土地利用の特徴が顕著な4月、8月、10月、12～1月の各月の遊動状況は次のとおりである。4月21日～29日の遊動域は、黒部川右岸の高基草原がよく発達した地域（標高200m～700m、面積1.51km<sup>2</sup>）であり、草原や落葉樹林でヨモギ、オオイタドリ、シシウド、トチ、イタヤカエデ等の若葉を採食した。8月7日～18日は、宇奈月町内山、音沢、栗虫、中谷地区の農耕地とその周辺のスギ植林地（標高200m～400m、面積3.21km<sup>2</sup>）を遊動した。農作物以外では、クズの花、葉、ウワミズザクラ、ミズキの果実を採食した。10月8日～17日は、黒部川右岸の自然林（標高200m～500m、面積0.91km<sup>2</sup>）を利用し、クリ、マルバマンサク等の種子、果実を採食した。12月27日～1月5日は、夏の遊動域と似た地域（標高200m以下、面積0.82km<sup>2</sup>）を利用した。農作物が少ないため、

林縁部でケンボナシの果実、ササの葉、ヤマグワの樹皮をよく採食した。

飛驒山系槍ヶ岳周辺に棲息するニホンザルの高山帯への適応についての生態学的研究

泉山茂之（野生動物保護管理事務所）

1989年度の調査は2月から11月までの65日間、1988年度に引き続きラジオテレメトリ法を用いて実施した。4月2日、高瀬川最源流に棲息するYN群（40頭）のオトナメス（9才）をわなにより捕獲、テレメーター発信機を装着した後放し、この個体を追跡することにより群れの追跡を実施した。また本年はSBC信越放送（本社長野市）の協力を得て、ヘリコプターによるロケーションを実施できた。ヘリコプターによるロケーションは5月4日から11月2日までの間合計8回実施した。岩山であり急峻な調査地域において、シャープな2メーター発信波は反射が激しく正確な追跡は熟練を要するが、上空からのロケーションは発信波をダイレクトに拾えるため極めて有効であった。しかし、パイロットの腕に左右されること、危険が大きいことに加え、騒音が大きいため上空からの群れ個体の観察は極めて困難で、群れの一部を観察したのは5月4日の1回のみであった。1988年、1989年度の積雪期の利用地域はそれぞれ2.25km<sup>2</sup>、2.50km<sup>2</sup>でほとんど変化がなかった。また、無雪期の遊動が安定する7～9月の利用地域もそれぞれ11.75km<sup>2</sup>、12.50km<sup>2</sup>で変化がなく安定している。両利用地域ははっきり分れ、無雪期には積雪期の利用地域を利用することはなかった。

春季の垂直移動期のヘリコプターによるロケーションポイントは6月14日、2,200m付近、6月25日、2,500m付近で、ダケカンバ、ミヤマハンノキなどの萌芽前線と一致し、ゆっくりと新芽を追いながら山を登っていると考えられた。また逆の秋季の垂直移動期の遊動は非常に複雑で9月29日、2,900mから3日後には1,700mに出現、アップダウンを繰り返した後10月21日には2,700mに出現、さらに11月2日には積雪40～50cmの2,550mに出現した。しかしこの後11月14日には積雪期の利用地域に戻り、冬芽、樹皮などを採食する冬の生活に入っていた。

YN（槍ヶ岳）群の群れサイズは1987年42頭、1988年37頭（+αあり）、1989年40頭とほとんど

変わっていない。槍ヶ岳から東方の亜高山帯以上の高山域には高瀬川籍の本群の他に中房川籍、烏川籍、梓川籍の3群が出現し、今後これらの群れの関係について研究を進めて行きたい。

下北半島西北域におけるニホンザルの生息環境と地域個体群の動態

森 治（下北野生生物研究所）  
和田 久（第一田名部小学校）

下北半島西北域のニホンザルは奥戸川流域を中心として遊動するM群、その東側、易国間川から大沢目沢にかけて遊動するI群、M群の南側、材木川から古佐井川の焼山沢にかけて遊動するZ群、それにM群の遊動域内の小さな群れAr群が知られている。

今年度はこのうち、I群とZ群について生息環境と群れの動きについて調査した。

#### （1）I群について

かつてI群は易国間川の本流およびその支流を利用していましたが、数年前より遊動域が東へ拡大し、大沢目沢に達した。これに先行して易国間川の小川目沢にそって林道が開設され、伐採が進められていた。この群れは一時、それを疑う現象もあったが、今年度の調査で分裂が確実となった。

#### （2）Z群について

この群れもI群とはほぼ同じ時期に遊動域が拡大し、分裂し、現在では、ひとつの群れは、かつての遊動域のより人家に近い地域を利用し、他の群れは山地の奥の地域を南側に利用域を拡大している。

#### （3）不明の群れ

これまで40年ほどにわたって群れの情報のなかった大畑川の上流で、一昨年秋に群れ目撃の情報があった。その後の調査で昨年1月、群れの観察例（和田）があり、今年2月に食痕による群れの移動跡の観察（森）があった。

昨年春の食痕調査により、この群れがI群に起因するものではないことが確かめられたが、Z群の分裂群か、全く新しく発見されたものかは不明である。

#### （4）環境条件と利用域の変化

I群とZ群の遊動域の拡大、分裂に基本的に作用しているのは森林伐採による環境変化であるこ